



保護者との信頼関係を築くには

文 | toshi
イラスト | 秋野 純子



早くも十二月。新学期スタート時の四月と比べれば、仕事にも慣れてきたことでしょう。

しかしどうでしょう。子どもとは信頼関係で結ばれていても、なかなか会うことのない保護者とはよい関係がもてているでしょうか。私も昔、「親が出てこなければもつといい関係を子どもとつくれるのに……」などと思ったものでした。そんな経験がなければ幸いですが、保護者との関係で悩まれている新米先生も少なくないと思います。そこで学級経営も最終段階を迎えようとしている今、どのように保護者とよい関係を築いたらよいか、考えてみたいと思います。

○まずは目の前の子どもを大切に

初任者研修をしていると、どの新米先生も一生懸命子どもと向き合い、頑張っ

ています。意欲にあふれていて、すばらしいなと思います。また、保護者ともしっかりと向き合っています。しかし、「今大事なことは何か」という視点が足りていないことがあります。ただがむしゃらに頑張っても効果が上がらないどころか、マイナスに作用してしまうこともあるのです。

例えば、連絡帳に長文の手紙を書いてくる保護者がいます。そうすると、給食も忘れ、子どもが話そうとしていても気づかず、返事を書いていることがあります。今、一番に考えなければいけないのは子どものことであるはず。こういう場合はコピーをとり、放課後、そのコピーに返事を書き、翌日の連絡帳に貼りつけて返すとよいでしょう。

○受け手の気持ちを考えて

保護者への連絡に、心がこもっているでしょうか。多忙なあまりビシツときつい言葉を浴びせてしまうことはないでしょうか。「乱暴、暴力、盗み、いじめ」といった言葉は、とかくきつづく伝わりがちです。連絡する際には、単刀直入ではなく、様子が伝わるような書き方をする、温かみを感じられます。例えば、「盗んだ」よりも「友達の物をちょっと取ってしまった」と書けば、保護者が受ける精神的なショックが和らぎます。

子どもと動き回れる。子どもと感覚がびったり合う。

それは子どもたちにとって最大の魅力。

「さあ！その若さという武器を最大限発揮しよう」

toshi 先生から新米先生へのエールです。

< toshi 先生プロフィール >

子どもたちと存分に遊んだ新任時代。日々子どもたちの思考の筋道を大切に、授業で子どもをどう生かすかを考える一方で、学級経営や児童理解のあり方に頭を悩ませた修行時代。子ども第一の学校経営を考えてきた校長時代。35年の教員生活を経て、現在は小学校の初任者指導にあたっている。「ある退職校長の想い」「小学校初任者のホームページ」でブログを執筆中。

伝え方に気を配ることは、受け手の気持ちを考えることにつながります。「今この内容で連絡したら、相手はどう受け取るかな」と考えるくらい心の余裕はもりたいものです。

○保護者もいろいろ

保護者の中には、神経質な方もいれば、鷹揚な方もいます。したがって、対応はケースバイケース。「そんなことでわざわざ連絡してこなくてもいいのに」と受け取りそうな保護者なら、「これは何かあった時、ついでに話そう」という気持ちになることも大切です。宿題の出し方などで意見が分かれることが考えられるなら、それを懇談会のテーマとし、皆で話し合ってもらうのもよいでしょう。

なお、万が一トラブルが起こったら、対応については先輩の指示を仰ぐようにしましょう。こうした場合は保護者もナーバスになりがち。適切に対応するにはどうしたらよいか、謝罪は必要かなど、先輩教員が教えてくれるでしょう。

○子どもへの愛情が保護者に伝わる

子どもが保護者に話す時、「やさしい先生・こわい先生」という言い方をしますね。しかし、子どもの目に映るやさしさ・こわさというのは、表面的な意味で

はなく、実は「心の温かさ・冷たさ」を表しているといっても過言ではありません。ですから、「ダメなものダメ」と厳しくしかる先生を、子どもが「やさしい先生」と感じていることはめずらしくないのです。どうか、ここは自信をもって《厳しくやさしい先生》でいてほしいと思います。そのほうが、保護者の信頼も増すものです。

保護者にとって、我が子は全てです。我が子を大切にしてくれている実感があれば、信頼関係も簡単に築くことができるとはなりません。甘やかすことでもありません。心の温かさ、子どもが感じ取れる温かさが伝わることなのです。

このようにして、保護者と信頼関係で結ばれると、何かことが起きたとしても、「ああ。あの先生のクラスで起きてしまったのね。あんなに頑張ってくれているのだから、仕方ないわね」と思われるもの。それが、「ああ。やっぱりね。起こるべくして起きてしまったわ」と思われるのでは、学級経営上、その差は美に大きなものがあります。

○誤解は、あつて当たり前

保護者は、普段の学級での我が子の様子がほとんどわかりません。ですから、子どもの言葉を通して理解したつもりにな

なっています。それだけに、誤解がつきものです。したがって、「誤解は当然ありうる」と日ごろから心得ておくと、案外冷静でいられるものです。

しかし、どうせ誤解されるなら、よい意味の誤解をされたいものだと思います。予期せず保護者から感謝されれば、初めは、「ええっ。そんなことでそんなふうに思ってくれるのか」と驚いたとしても、うれしく思うはず。それには、よい関係を普段からつくっておくことが大切です。

そして、学級のため、学級の子どものためにご尽力いただいている保護者には、こちらからも感謝の言葉を忘れないようにしたいものです。

